

„Der Steppenwolf“ の人物形象解釈の試み

… „Demian“ との対比に於て…

丹 治 信 義

(1) 人物形象解釈の必要性

„In den Augen kühl und hell schwamm wissende Trauer, diese Augen schienen schon alles irgendwo erdenkliche Leid gelitten und ja dazu gesagt zu haben. Der Mund sprach schwer und wie behindert, etwa so, wie man spricht, wenn einem großer Frost das Gesicht erstarrt hat; aber zwischen den Lippen, in den Mundwinkeln, im Spiel der nur selten sichtbar werdenden Zungenspitze floß, im Widerspruch zu Blick und Stimme, lauter süße spielende Sinnlichkeit, inziges Lustverlangen. In die stille glatte Stirn hing eine kurze Locke herab, von dort aus, von dieser Stirnseite mit der Locke her, strömte von Zeit zu Zeit wie lebendiger Atem jene Welle von Knabenähnlichkeit, von hermaphroditischer Magie“.¹⁾

これは Hermann Hesse の作品 „Der Steppenwolf“ に登場する若い娼婦 Hermine の描写である。眼差に知性を秘め、口元に官能的なものを秘めた、即ち知性と感性の不思議に交錯した女である。又女であってどこか少年らしいところもある hermaphroditisch な性格の女である。こうした人物は Hesse の作品中でも珍しい。

ところで、„Der Steppenwolf“ に挿入された „Tractat vom Steppenwolf“ の中で、魂の多元性を説明せんとして次のように書かれていることは注目すべきであろう。

＜我々の現代世界にも、恐らく作者は十分に意識しているのではあるまいが、個人や性格などのヴェールにかくれて、魂の多元性を表現しようと試みている作品がある。その事実を承認しようとする者は、かくのごとき作品中の人物は決して個人ではなく、より高次の統一体（私について言えば詩人の魂）の部分であり、側面であり、種々の様相であると観なければならぬ＞²⁾

この＜恐らく作者は十分に意識しているのではあるまいが……＞に着目するなら、少なくとも、この作品に関する限り作者は十分に意識して、個人や性格を通して魂の多元性 (Seelenvielfalt) を、或は詩人の心を、表現しているのだ、と解し得るわけである。

この観点に立つならば、上記の娼婦の、理性と感性、男と女との交錯した性格は極めて興味深いものであり、分析整理されて全体の中で捉えられねばならない、換言すれば、人物形象の解釈は、この作品の理解に不可欠のものとなってくるわけである。

(2) 構成

登場人物の性格分析をする際には、まず問題の所在と作品の全構成の中で果たされる各人物の役割を明きらかにする必要がある。

„Der Steppenwolf“ は、大別すれば三つの部分から成り立っている。第一は、主人公が宿を借りた家の主婦の甥の手になる „編集者の序“ (Vorwort des Herausgebers) であり、第二は主人公

の „手記“ (Harry Hallers Aufzeichnungen) であり、第三は „手記“ に挿入される „荒野の狼論“ (Tractat vom Steppenwolf) である。

第一の „編集者の序“ では主人公の生活が外側から描かれ、第二の „手記“ では、主人公の内面が主人公自身によって描かれる。第三の „荒野の狼論“ では、主人公の問題の本質が、個人のものだけでなく時代の問題として取り扱われ、その問題の解決の方向が示される。さて、主人公であるが、彼は現実の市民社会に失望し、更に自分の中にも、自分の理想とする〈人格 (Persönlichkeit)〉に反するもの、即ち獣性を見だして、自らを „荒野の狼“ と称し、社会に失望すると同様自己にも絶望し、自殺を計画している50才近い男という設定である。Hesse がここに自己の姿を投影していることは明きらかである。

„荒野の狼論“ では、人間が三段階に分類されている³⁾。ひとつはいわゆる市民、ひとつは多分に観念上のものであるが不滅の精神世界に住むもの、即ち Goethe であり、Mozart である。残るひとつは、市民社会に失望し、不滅の精神世界に憧れながら、そこに入れないもの、憧れと失望の間に揺れ動く苦悩する人々、即ち Outsider である。主人公 Harry Haller は、この最後の Outsider⁴⁾ に属している。Hesse は、ここに、自己の姿を投影することにより、大戦間時代の知識人の苦悩を描いているのである。

さて、„手記“ は、主人公と市民生活との対立から始まる、彼は市民社会に満足出来ないが、なおそこに郷愁を感じている。これが、彼が、不滅世界へ入れない原因のひとつである。

ある夜、寂しい街の小路をさまよってふと、教会と病院の間の石壁に明滅する文字 „Magisches Theater. Eintritt nicht für jedermann, Nur für Verrückte“! と書かれた魔術劇場への招待を読み取る…… „手記“ のはじめにも „Nur für Verrückte“ と付言されているように „手記“ は、幻想と現実との混合した雰囲気の中に始まり、また展開されるのである。

例えば、先に述べた „荒野の狼論“ もたまたま通りかかったビラくばりに頼んで手に入れたものだが、それが „荒野の狼論“ と題された彼自身についての論文だったのである。しかも „手記“ 全体は、この論文をめぐる展開するのである。即ち最も現代的問題がロマン派風の手法の中で展開されて行くのである。^{5)*}

„論文“ では、第一に主人公 H. Haller の自意識が示される。即ち自己の内部に 〈人間〉 と 〈狼〉 とが住み、相争っているために苦しまねばならぬのだ、なんとか〈狼〉を追い出して〈人間〉として統一体になりたい……と願う Haller の意識状態が分析される。第二は、確かに Haller の中には〈人間〉と〈狼〉は存在するが本来人間というものは、Haller の考えるような狭い〈人間〉でなく〈人間〉と〈狼〉とを共々内臓しているものなのだ、それだけでなく、この二つのもののみでなく、無数の魂と無限の可能性を内包しているものなのだ。だから〈人間〉に統一するのでなく、本来の多様性をこそ承認すべきである……と説かれ、そしてその統一の試みは魔術劇場でなされるであろう……と予告されるのである。これが人間心理の内奥に無意識なもの存在を指摘し „Persönlichkeit“ の中に Es, Ich, Überich の働きを認める精神分析学の考えを基盤としていることは明きらかであるが、後半のロマン派風の救済の中に、Hesse 独自の思索が

うかがえる。„手記“後半は、この„論文“の予告する救済に向って展開されるのであるが、その中に、導き手として登場するのが、初めに述べた娼婦 Hermine である。彼女は主人公に、ジャズやダンスを教え、娼婦 Maria を与え、サキソフオン奏者 Pablo を紹介する。彼女の教えるものはジャズにしるダンスにしる、生き生きとして生命に充ち溢れるものであるが、主人公の〈人格〉意識には反するものであるのが特色である。これが、主人公の行き詰った〈人格〉意識、人間観の解体の試みだからである。主人公は、仮面舞踏会の夜、ジャズのサキソフオン奏者 Pablo の手に委ねられ、Pablo の魔術劇場に理性を入場料として支払って入場し、自我解体の試みとその新たな統一の試みを体験する——これが„手記“の概略である。

筋立ての上で捉えられる Hermine の特性は娼婦であることと、指導者である点であるが、その性格を細かく分析するなら、他に注目すべき特性のあることは既に述べた通りである。Hermine に対する描写は„手記“という制約のもとで、主人公の眼を通してのみ捉えられるが、いまその特徴の顕著な部分を挙げてみよう：

„… indem ich jetzt ihr Gesicht genau betrachtete, …… , es war ein Knabengesicht. Und als ich mir eine Minute Zeit ließ, begann das Gesicht zu mir zu sprechen und erinnerte mich an meine eigene Knabenzeit und an meinen damaligen Freund, der hatte Hermann geheißten. Einen Augenblick schien die ganz in diesen Hermann verwandelt.“⁶⁾

Hermann が Hesse の Vorname であることは、ことわるまでもないが、H. Haller に Heese は自己を投影している点を考えるなら、この友人 Hermanu も Haller と同じく Hesse の分身であり、間接的であっても Haller の幼年期と結び付くものである。„Der Steppenwolf“をはじめ„Demian“, „Morgenlandfahrt“等で、Hesse は幾つかの Namenspiel⁷⁾を行っておりこれもそのひとつであるが、ここでは Hermine が主人公の幼年時代、なにものにも囚われぬ(„人格“意識にも)幼年時代を思い出させるのである。更に：

„… daß sie ganz plötzlich vom tiefsten Ernst zur drolligsten Lustigkeit übergehen konnte und umgekehrt und sich dabei gar nicht änderte und verzerrte, es war wie bei einem begabten Kinde.“……⁸⁾

或は、

„… darin war Hermine wie das Leben selbst: stets nur Augenblick, nie im voraus zu berechnen.“⁹⁾

hermaphroditisch な性格、並びに時々現われる超時間的相貌……更に導き手という点を考慮に入れるなら、我々は、既に„Demian“に於て、こうした人物に出会っている、少年 Demian とその母 Frau Eva である。従って、Hermine は、Demian と対比するのが最も適当であると思われる。以下„Demian“と対比して„Der Steppenwolf“の人物形象を明きらかにしてみたい。

(3) Demian との対比

作品„Demian“の主要な登場人物は、主人公 Sinclair 友人 Demian, 教会のオルガン弾き Pistorius と Demian の母 Frau Eva である。このうちまず、Hermine に対比すべきは少年 Demian である。

さて、Demian について考察するには、当時の詩人の思想と体験とに言及する必要がある。„Demian“ 以前に、このような性格の人物は登場していないからである。従って特異な人物形象を生む背景を明きらかにする必要があると思われるからである。

1927年の „Der Steppenwolf“ までの変化たどるとき1904年の „Peter Camenzind“ による成功以前と、1904年から第一次大戦勃発まで、それから1919年の „Demian“ 以後の三期に分けるのが適当であろう。1904年以前の無名時代、大戦迄の安定した作家時代と、変貌著しい Demian 以後の時代と呼んでよいであろう。

1904年以前の体験で、まず注目すべきものは、14才 Maulbronn 神学校入学、15才神経衰弱のため自殺をはかり退学する、16才カンシュタット (Cannstatt) の高等学校へ入るが一年で退学、エリスゲンで書店員となるが三日で止める、17才町工場で時計の歯車磨きを半年ほどする、18才チュービンゲン (Tübingen) で書店員となり、ようやく落ち着く、そして詩や散文を書き始める。これから27才の „Peter Camenzind“ の成功までは比較的落ち着いた生活が続くのであるが、この14才~18才までの激動は、どう解釈されるのだろうか。

Hesse 自身の言葉に従うなら、当時の状態は „Kurzgefaßter Lebenslauf“ の中で次のように書かれている：〈学校生活のはじめの7,8年は善良な生徒で、少なくとももいつもクラスの上位を占めていたが、13才のときに詩人になりたい、でなれば、なににもなりたくないという激しい感情に襲われて学校生活と対立した……4年以上なにをやってもうまく行かなかったのだ。〉¹⁰⁾ 勿論、それだけではなかったであろう。„Unterm Rad“ に描かれる教育の問題あるいは „Demian“ に描かれる性の目覚め、自我の目覚めなど、少年期から青年期特有の問題が錯綜していたに違いない。„Unterm Rad“ をはじめ繰返し繰返し、幼少年期を描かずにいられない Hesse を観るときは、むしろ少年期の激動、社会に対する不満、理解されたいという欲望が、Hesse を詩人にした——と解釈した方が素直に思えるほど少年期の問題は、Hesse にとって大きなものであったと言える。

兎に角も、この〈詩人になりたい〉という激しい願望は、1904年の „Peter Camenzind“ の成功で充たされることになり、恵まれた作家生活が1914年の大戦勃発まで続くのである。

大戦勃発と同時に、当時スイスに住んでいた Hesse はベルンの領事館に奉仕を申し出て、1915年に兵士として召集されたが便宜を得てベルン公使館で、スイスに抑留されているドイツ人への慰問通信の仕事をした。この仕事を続けながら、Hesse は、„O, Freund, nicht diese Töne“, „An einen Staatmeister“, „Wenn der Krieg noch zwei Jahre dauert…“ 等の戦争に反対する評論を公にした、これは主に学者、教師、芸術家、文学者など、平和と文化への仕事に従事する者に対する穏やかな呼び掛けであった：〈戦場で榴弾を浴びながら、血と生命とを捧げて戦っている人達を尊敬せよ！ 故国を愛し、未来を絶望し得ない我々戦場外の人達にとっては僅かの平和でもこれを維持し、橋を架け、道を探すことが、その使命であって、決して（ペンをもって）一緒に切り込んでいってヨーロッパの未来のための基礎をこれ以上揺がしてはならない。〉¹¹⁾ 然し当時のドイツはこれを素直に受入れる状態ではなかった。売国奴と罵られ、弾劾を招いただけであっ

た。

奉仕の仕事による過労，誤解による心労，加えるに父の死と息子の重病，妻の精神病の悪化…と重なる悪条件が，Hesse をひどい神経衰弱に追い込み，医者勧めにより，ルツェルン郊外の療養所で，Jung 派の精神分析医 Lang の診察を受けることになり，その治療は1916～17年に亘り，合計60回にも及んだと言われる。この精神分析学との出会いが，Hesse に多大な影響を与えることになったのである。治療を受けると同時に，Hesse は，Freud をはじめとする分析医の著書を沢山読んだと言われる。これらが，シュワーベンの Heimatdichter から広い視野に立つ作家への変貌の契機であった。

自分自身，社会，あるいは社会に対する自分の立場等が，徹底的に検討されたのである。例えば，あれほど周囲と衝突せずにはいらなかった少年期についても，<20年後にようやく私はあの戦の意味を理解した。当時は，それはただそこに存在し，恐ろしい不幸として私の意志に逆らい，私を取りまくばかりだった¹²⁾>と書いているように，精神分析学が詩人の転換に，如何にあずかって力があつたか理解できる。

従来にも，„Unterm Rad“ の Hans のように，期待し期待されて入学した神学校から結局抜け出さずいられない少年をはじめ，内奥からの暗い情熱に振り回され，自ら命を絶つ „Gertrud“ のハインリヒ・ムオト，ふとした事から生涯を放浪者として旅に過す Knulp 等……何ものかに操られているかのように市民社会から脱落せざるを得ない人間を描いて来た Hesse が，人間心理の内奥に無意識界の存在とその支配とを指摘する精神分析学に共感したのも当然であったと言える。この1916～17年の治療の苦悩と興奮の中から，„Demian“ は生れたのである。

この少年期と壮年期の二つの出来事に共通する点は，社会との同調不能であるが，いずれの場合にも，Hesse は結局自分を守り通した。そして，いずれの場合にも，自己に誤りはなかったと確信出来た。この確信が，„Demian“ に 於ける，<自己の内心の声>への信頼の基になっていると思われる。

„Kurzgefaßter Lebenslauf“ の中の次の文章も，この自己への信頼を述べている。

<私は自分の使命，というよりも救いへの道を，もうずっと以前から，抒情詩や哲学やそういった種類のなにか専門家的な話の領域の中には見ず，数少ない真に生き生きしたもの強いものを自分の心の中で生かすこと，自分の中に生きているのが感じられるものに対して徹底的に忠実であること，ただそれだけのうちに見たのである。それが生命であり，神であった。¹³⁾> 浮動する外部世界に対して，詩人が唯ひとつ信じ得ると感じたものは，自己の内面，人間の内部に宿る生命であった。

こうした背景を基に Demian を観察するなら，これが，人間の内部に宿る Dämon，又は生命の象徴であることが分かるであろう。

Demian について特徴の顕著な部分を挙げてみると：

„Ich sah Demians Gesicht, und ich sah nicht nur, daß er kein Knabengesicht hatte, sondern das eines Mannes; ich sah noch mehr, ich glaubte zu sehen, oder zu spüren, daß es auch

nicht Gesicht eines Mannes sei, sondern noch etwas anderes. Es war, als sei auch etwas von einem Frauengesicht darin, und namentlich schien dies Gesicht mir, für einen Augenblick, nicht männlich oder kindlich, nicht alt oder jung, sondern irgendwie tausendjährig, irgendwie zeitlos, von anderen Zeitläuften gestempelt, als wir sie leben.“¹⁴⁾

ここに Hermine の特徴であった hermaphroditisch な性格と超時間性があらわれているのは明きらかであろう。人間の生命そのものが男女両性をその内に秘め、遠い過去から遙るかな未来まで続いて行くものであり、単なる個ではない。主人公が、公園でふと見かけた少女に恋をして、その姿を部屋に籠って描く部分も暗示的である。〈夢見心持に画筆を使い〉、〈無意識の境から生れて来るような線を引いたり〉して〈殆ど意識せず〉に、その顔を描き上げたとき、その画は：

„…Es schien mir eine Art von Götterbild oder heiliger Maske zu sein, halb männlich, halb weiblich, ohne Alter ebenso willensstark wie träumerisch, ebenso starr wie heimlich lebendig.“¹⁵⁾

こうして出来た画が、ある夜窓から吹込んだ雨にぬれたとき、Demian の顔になる。即ち、技巧とか意識的なものが、全く消え去った時、根元的なもの、人間存在の奥底が現われて来るのである。

この画の Demian との類似を決定的にするのは、たまたま、吹き込んで来た雨である。そこには人間の意志をはるかに超えた自然の力が現われて来るのである、更にこの画は、Demian でもなく最後には主人公の生命、心、運命あるいは Dämon と意識されるのである。

これらからも Demian が、人間の根源の力としての Dämon あるいは生命の象徴であると見てよいであろう。又 Märchen, „ピクトルの変身“ (Piktors Verwandlungen) の中でも、男と女を兼ね備えた木、太陽と月とから成る木が、生命の木と呼ばれるのも、同じ発想によるものであろう。

男と女、明と暗、善と悪、あらゆる対立の根源が人間の生命の内に、あるいは自然の中に避け難く存在すると Hesse は見ているのであろう。

更に、Demian の指導者としての立場に注目するなら、主人公は、生命、Dämon の導きに従うことが暗示されていると見る事が出来る。

これは戦争を契機とする混乱、あらゆる価値感の転換、理想の崩壊……の中で、Hesse が、生命、自我を唯一の依り処として信じようとしたからであろう。これが、精神分析により啓発された思考の結果であることは確かであるが、またそれが、Hesse 独自のロマン派風の思考の中で捉えられていることも確かである。大戦後の時代が、精神分析の汎性欲論に頹廢への裏付けのひとつを見出したことと考え合わせると、詩人の資質、その理想主義者としての性格が明きらかになるであろう。又戦後数年しての Hesse の失望は、この時代思潮と詩人との差異から生れて来るのである。

さて、Hermine が、この Demian の延長上にあることは明きらかであろう。その名にも織り込まれている hermaphroditisch な性格、超時間性、あるいはその指導者としての立場が、これを十分に裏付けていると言えるであろう。(Hermine は Hermann の女性形であり、Hermann は Heer-mann, Kriegs-mann である)。

(4) Frau Eva と Pablo

作品 „Demian“ には、もう一人注目すべき人物が登場する、先にも述べた Frau Eva である。Eva が愛称であること、また Demian の母である点に、その性格の特色がうかがえる。彼女は、はじめは主人公の夢の中にあられる憧れの像として、次の様に描かれる：

„…ich kehrte in mein Vaterhaus zurück……—im Hause kam mir meine Mutter entgegen— aber als ich eintrat und sie umarmen wollte, war es nicht sie, sondern eine nie gesehene Gestalt, groß und mächtig, dem Max Demian und meinem gemalten Blatte ähnlich, doch anders, und trotz der Mächtigkeit ganz und gar weiblich. Diese Gestalt zog mich an sich und nahm mich in eine tiefe, schauernde Liebesumarmung auf. Wonne und Grausen waren vermischt, die Umarmung war Gottesdienst und war ebenso Verbrechen.“¹⁶⁾

ここには精神分析学の指摘する Mutterbindung, 性倒錯などが充分うかがえるが、物語の構成の上では、その母性が注目される。また、男と女、善と悪等の対立の混在も注目すべきである。更に特徴の顕著な部分を挙げると、

„…als ich nun das kleine Bildnis sah, blieb mir der Herzschlag stehen. —Das war mein Traumbild! Das war sie, die große, fast männliche Frauenfigur, ihrem Sohne ähnlich, mit Zügen von Mütterlichkeit, Zügen von Strenge, Zügen von tiefer Leidenschaft, schön und verlockend, schön und unnahbar, Dämon und Mutter, Schicksal und Geliebte. …“

„Sie war ein Meer, in das ich strömend mündete. Sie war ein Stern, und ich selbst war als ein Stern zu ihr unterwegs, …“¹⁷⁾

Frau Eva についての描写は、上記の如く、Dämon であり、母であり、運命であり恋人であるがその母性に注目するなら、Demian が、個々の人間の Dämon あるいは生命を象徴するのに対して、Frau Eva は人類に共通の集団無意識¹⁸⁾ を象徴するとも解し得る、また大きく見るならば <万物の母>である自然の象徴であるとも解釈し得るわけである。主人公 Sinclair と Frau Eva との出会いが「帰郷」であり「成就」であると感じられ、<もはや、冷厳にして孤独ではなく、成就して悦楽に溢れていた。私は決心もしなければ誓いもしなかった。—私はひとつの目標、路上の高い地点に着いた>¹⁹⁾ と表現されるのは、先にも述べた、第一次大戦の未曾有の混乱を、ヨーロッパの歪んだ文明の当然の帰結とし、ともかくも、ひとたびは始原の状態に、立ち帰り、そこから、再び、内心の声に導かれて出直そうという Hesse の立場を示すものなのであろう。

始原に立ち帰り、Dämon, 生命の導きに身を委ねる……これが „Demian“ に於ける Hesse の結論であったが、„Der Steppenwolf“ では、志向すべき目標が示されている。それは „荒野の狼論“ 中の人間定義の中に端的に表現されている、即ち、<人間というものは決して固定的な永続的な形成体ではなく、むしろひとつの試みであり、橋渡しであり、自然と精神とをつなぐ狭い危っかしい橋に過ぎない。内奥の定めは、彼を精神へ神へ赴かしめ一切実なる憧憬は彼を自然へ母へ呼び返すのである。>²⁰⁾ そして<自然に帰ることによって人間は常に悩ましく絶望的な路をたどるばかりである。> 道は後方でなく前方へ、<人間生成>の中へ突き進むのだと説かれている。

„Demian“ に於ける自然への願望が、ここでは再び、精神世界へ、過去の文明の遺産でもある古典の世界への希求に変っているのである。

ここで „Demian“ の、主人公 Sinclair—Demian—Frau Eva という系列に対比するものとしては、„Der Steppenwolf“ では、主人公 H. Haller—Hermine—Pablo が考えられる。Demian と Hermine の類似は前に述べたが、Frau Eva、と Pablo とは、全く異なる存在である。Frau Eva が自然を表現するのに対して、Pablo は精神を代表するからであろう。

Pablo は、Hermine の友人であり、酒場のジャズ楽団のサクソフオン奏者である。ラテン系の黒い髪をした体格の勝れた蕩児という設定であるが、彼の精神性は、彼が、魔術劇場の魔術師でもあり、彼の魔術の目的が主人公の教育と救済にある点に表現されている。彼が劇場に不滅の人 Mozart として登場するのも、そのあらわれであろう。従って Pablo の思想は、Mozart を通して表現されるが、それは次のような巧みな比喻で示されている、即ち、ヘンデルの音楽は、たとえ粗末なラジオによって放送されても、その根源の精神は破壊されることはない、それどころかラジオは、すぐれた音楽により、ますますその技術の粗末さを表明するだけである。それと同様に今、現実世界は混乱し、絶望的な様相を呈しているが、その背後には、未だ不滅の精神、あるいは神の意志は生きているのだ、それを信じて、現実の混乱を笑って受け入れよ、…という比喻である。これが大戦後ドイツ社会の変貌を数年間見詰めて来た詩人の結論であったろう。„Demian“ 執筆中の昂揚した状態はとうに終り戦後新しいものが生れるだろうという期待は虚しかった、戦争に刺激された機械文明の目覚しい発達は、人間性喪失という問題で、一層深刻な事態を生み出し、再び戦争の準備さえ始っていた……こうした1920年代後半の現実に対する失望が、詩人を、不変なものとしての古典世界、精神世界、ことに自己の使命である文学に向かわせたのであろう。

Pablo の音楽に対する態度が、Hesse の文学に対する立場を端的に示していると思われる。主人公 H. Haller の高尚な音楽理論に対する Pablo の答えは、大切なのは唯精一杯に音楽すること „daß man musiziert, Herr Haller, daß man so gut und so intensiv wie möglich musiziert!“²¹⁾ なのであり更に

„Sehen Sie einmal in einem Ballsaal die Gesichter an in dem Augenblick, wo nach einer längerer Pause die Musik wieder loslegt—wie da die Augen blitzen, die Gesichter zu lachen anfangen! Das ist es, wofür man musiziert.“²²⁾

自己の使命への献身であり、それを通して社会への献身である。

„Der Steppenwolf“ 以後の作品では、時代との直接的関連は失なわれて行くが、Hesse の創作意欲は、むしろ盛んになり、„Narziss und Goldmund“ „Morgenlandfahrt“, あるいは大作 „Das Glasperlenspiel“ などの代表作が、これから第二次大戦中にわたって書かれているのも、Hesse の文学という自己の使命への献身のひとつの現われとも言えるであろう。また1929年の全世界の古典作品を集めた „Eine Bibliothek der Weltliteratur“ という仕事の中にも、あるいは、非常に数にのぼる読者との丁寧な文通の中にも、Hesse の自らの使命への献身がうかがえるのである。

(5) 人物形象の効果

以上考察して来た様に、„Demian“ „Der Steppenwolf“ に登場する人物のうち幾人かは、冒頭

に引用した如く、人物、性格を通しての思想表現の Hesse 独自の方法であることは明きらかであろう。これが、Hesse にとっても全く新しい方法であり、実験であったこと、並びにこの実験を支えたのが精神分析学及びそれに刺激された思索であることは、„Künstler und Psychoanalyse“の中で、〈分析の方法〉をその儘、〈芸術の方法〉の中に持込むのはよくないが、精神分析が芸術家を助けることは明きらかである、それは〈空想と虚構の価値を保証〉(„…die tiefe Bestätigung vom Wert der Phantasie, der Fiktion“, …)²³⁾してくれる、単なる虚構と思われるものの中に魂の根本的要求が存在 („das Dasein seelischer Grundforderungen“) することを教えてくれる…と精神分析学を正当に評価していることでも明らかである。

要するに、精神分析学は、人間解釈、作品の方法という二つの面で、詩人に大きな影響を与えたのである。

Demian, Frau Eva 等の特異な性格が作品に与えた効果に就き一言するなら、こうした特異な性格と人物とは不自然な感じがないでもないが、この作品の基調である生命の無限な可能性への信仰と見事に調和して、夢や予感と期待に溢れた青年期特有の雰囲気を生み出すのに大きな役割を演じていると言える。従ってこれが „Demian“ が、青春の文学として大きな成功を収めた要因のひとつであると見てよいであろう。

ところで、„Der Steppenwolf“ においては、筋立てにおいても、登場人物においても、„Demian“ との類似は上述のごとく明きらかであるが、その印象、効果では全く異なる、その原因はどこに求められるのであろうか。

ひとつには全構成の差違に起因すると思われる。„Demian“ においては、読心術、夢の予告、雲の中に現われる戦争の予告等…神秘的、非現実的事象と現実との見事な交錯がその雰囲気を醸成していた。„Der Steppenwolf“ にも、非現実的出来事、幻想的描写は頻出するが、次のような違いがある。

まず魔術劇場であるが、ここには当時ようやく盛んになりはじめた映画の影響であろうか、時間と空間の制約が取り払われて、過去も未来も、自己の問題も、社会の問題もめまぐるしく入れ替り、自在に映像化されているが、要するに劇場という条件〈入場〉という手続を経たために、あらゆる魔法が本来の魔力、神秘感を失い、緊張は生れて来ない²⁴⁾。更にこの „手記“ そのものが、あらかじめ〈読者は狂人に限る〉(„Nur für Verrückte“) という但し書きを持つこと、並びに、„編集者の序“ において、次のような解説が与えられていることも、その虚構性を強く告げている：

„Es war mir nicht möglich, die Erlebnisse, von denen Hallers Manuskript erzählt, auf ihren Gehalt an Realität nachzuprüfen. Ich zweifle nicht daran, daß sie zum größten Teil Dichtungen sind, nicht aber im Sinn willkürlicher Erfindung, sondern im Sinne eines Ausdrucksversuches, der tief erlebte seelische Vorgänge im Kleide sichtbarer Ereignisse darstellt. …“²⁵⁾

これは背後の真実はあるにしても、明きらかに全体の虚構性の強調である。こうした神秘感の拒否について、原因を求めるなら、ひとつは „Demian“ の基盤であった生命の無限の可能性に対する信仰の喪失であろう。先にも引用した „Kurzgefaßter Lebenslauf“ の中で、„Demian“ 執筆中の昂揚した状態を〈後年、こういう命にかかわるほど危険な高い緊張の時期が過ぎ去ると、

……当時の内容と名称が意味を失って、一昨日の神聖なものが殆ど滑稽な響きを与えかねないからである>²⁶⁾と評しているのも、この状況を伝えるものである。

この煩しいまでの手続のいまひとつの原因は、この作品の特殊な性格、従来にない厳しい自己告白…という性格に基くものと思われる。度々述べて来たことであるが、主人公 H. Haller への Hesse の自己投影は、従来のどの作品よりも緊密である。„Demian“ にせよ „Siddhartha“ にせよ „Klein und Wagner“,あるいは初期の作品にせよ、作品中の主人公の独立性、即ち作者との差異は明白であった。が、H. Haller は多分に戯画化されてはいるが、作者の面影を十分に背負っている。しかもそれが少年期の回想などでなく、1927年当時の作者の面影なのである。

これを虚構と自己投影という側面で考察するなら、次のように言って良いだろう。つまり、虚構あるいは戯画化により、主人公と現実の Hesse との交錯から生れる軽妙な効果（これは、この小説の主題のひとつ Humor と関係のある事だが、これについては別の機会に考えてみたい）と共に、一層自由で大胆な告白、真情の表出が可能になるのである。

従って、その真価は、真情告白そのものの困難さに加えて、特に当時の状況、並びに第一次大戦時の辛い体験等を考慮せねば、正当には評価できないであろう。

いづれにしても、以上見て来た人物形象化の方法、あるいは作品構成法が „Demian“ 以後の Hesse の作品構成の基盤を成していることは指摘してよいであろう。

(注)

- 1) Der Steppenwolf. S. 117.
- 2) „ Tractat vom Steppenwolf. S. 24.
- 3) Gerhart Mayer: „Die Begegnung des Christentums mit den asiatischen Religionen im Werk Hermann Hesses“ に詳しい。
- 4) Colin Wilson „The outsider“ 第3章。
- 5) Dr. Kurt Weibel. Hermann Hesse und die deutsche Romantik. に於て、〈中世的雰囲気現代への改鋳〉と、Steppenwolf を評している。
- 6) Der Steppenwolf. S. 114.
- 7) Dr. Kurt Weibel: Hermann Hesse und die deutsche Romantik. に詳しい解説がある。
- 8) Der Steppenwolf. S. 114.
- 9) „ S. 120.
- 10) Kurzgefaßter Lebenslauf. S. 471~2.
- 11)
- 12) Kurzgefaßter Lebenslauf. S. 472.
- 13) „ S. 481.
- 14) Demian. S. 69.
- 15) „ S. 109.
- 16) „ S. 124.
- 17) „ S. 170.
- 18) Jung の指摘するもので、Hesse が治療を受けたのは Jung 派の分析医 Lang によるためか „Demian“ の冒頭にも、集団無意識による思考が見られる。
- 19) Demian. S. 182.
- 20) Der Steppenwolf. のうち、Tractat vom Steppenwolf. S. 26.

- 21) Demian. S. 147.
 - 22) " S. 148.
 - 23) Künstler und Psychoanalyse. S. 139~140.
 - 24) 映画美学入門, 第2章 (浅沼圭司著)
 - 25) Der Steppenwolf. S. 28.
 - 26) Kurzgefaßter Lebenslauf. S. 481.
- 注. (文中の邦訳は, 一部三笠書房版, ヘツセ全集に依った)

参 考 文 献

- Hugo Ball: Hermann Hesse. Sein Leben und sein Werk.
Bernhard Zeller: Hermann Hesse.
G. Habner: Hermann Hesse
Franz Baumer: Hermann Hesse.
高橋健二: ヘツセ研究 (新潮社)
相良守峯他: ヘツセ研究 (三笠書房)